

民族舞踊の教材活用の可能性を探る——家政学を基盤とした家庭分野に焦点をあてて

弓削田 綾乃 (和洋女子大学)

1. 研究の背景と目的

本研究では、民族舞踊の多様性を学際的にとらえるアプローチの一つとして、教材としての活用の可能性を探る。着目したのは、家政学を基盤とした家庭分野との連携である。

家政学は、「人間生活における人と環境との相互作用について、人的・物的両面から研究し、生活の質の向上と人類の福祉に貢献する実践的総合科学」と定義される¹⁾。そして中学の家庭分野の目標は、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造する資質・能力を育成する」こととされる²⁾。これらに着目すると、人の生活全般を対象として社会の変化と多様性に対応しながら、普遍的価値を体験的に探究する点に、民族舞踊との親和性が見出せるのではないかと考えた。

そこで本研究は、家政学を基盤とする家庭分野を対象に、民族舞踊との学際的連携の可能性を検討することを目的とする。

2. 研究の対象と方法

A社、B社、C社発行の中学『家庭分野』教科書(いずれも2021年(令和3年)度改訂)と各指導書、および新学習指導要領(2018年~2021年は移行期)を対象とする。現在、国内の中学校では、3社のいずれかの教科書が用いられている。本研究では、新学習指導要領で追加された内容と、教科書での学び方を分析する。また教科書に付随するデジタルコンテンツの内容を分析し、民族舞踊のコンテンツを参考に課題を検討する。

3. 結果および考察

3-1. 3系統の構成要素

新学習指導要領で、家庭分野の3系統が明示された。それは、「家族・家庭生活」「衣食住」「消費生活・環境」である。これらに共通した観点としては、協力・協働、健康・快適・安全、継承・創造等があげられている。

「家族・家庭生活」は、家族・家庭や地域における様々な問題を扱っており、特に、地域の人々との協働に関する内容が新設された。

「衣食住」では、食育、日本の伝統的な生活文化、グローバル化などに関する諸問題が追加された。特に、伝統的な衣食住については、継承と創

造が課題としてあげられている。

「消費生活・環境」では、持続可能な社会の構築に関する内容が追加された。

以上から、学習者の環境に応じた地域・人との関わりや、生活文化に対する包括的理解と創造性などが求められるようになったことがわかる。

3-2. 衣文化の事例

A社では、単元「つなげよう和服の文化」で、能や相撲の行司等の写真とともに、“着物に似た”ブータンの衣服も紹介されていた。和服の立体構成を学んだあとは、浴衣の着体験が推奨されている。B社では、「世界の衣食住」という見開きでアジア、アフリカ、ヨーロッパ、北米、南米の衣食住が紹介されていた。C社では、発展的学びとして、「世界の民族衣装」4例が紹介されており、他教科(社会)との関連が示唆されていた。

このように、いずれも衣文化の単元で「浴衣」がとり上げられ、着体験が最終的段階とされていた。また、浴衣の着方法のデジタルコンテンツが付随しているのも共通していた。動画は、あくまでも着る方法のみで、所作についての解説はない。評価ポイントが「着用を通して和服の特徴を理解できたか」であることから、着のみで終わらない体験が必要なのではないだろうか。たとえば浴衣を着た状態で盆踊りを踊ることで、和服への気づきを促し、デジタルコンテンツで多彩な民族舞踊を鑑賞することで、異なる衣文化への関心を引き出すことができるだろう。

3-3. デジタル教材

対象としたデジタルコンテンツは、文字の解説、写真中心の静止画像、模範となる動画とで構成されていた。いずれも各単元の内容と連動し、単独で視聴しても学べる内容になっている。

一方、民族舞踊のデジタル教材としては、遠藤らがアフリカのガーナ共和国の舞踊を学ぶコンテンツを発表している³⁾。そこでは、舞踊のみならず、衣食住や経済などの文化・社会が取り上げられ、生活全般と民族舞踊の学びが不可分な関係にあることが示されていた。

以上を踏まえると、教材としてのデジタルコンテンツは、その内容構成によっては、家庭分野の軸である「人の生活の営み」を、より学際的・包括的に学ぶ場になりうるのではないかと考える。

文献

- 1) 日本家政学会「生活の質の向上を目指す新しい家政学へ」2018
- 2) 文部科学省「[技術・家庭編] 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説」2017
- 3) 遠藤保子ら「デジタル教材の制作」2020